

獣医関係巻物に関する研究

1 長野県駒ヶ根、笹古家の安西流安驥巻物について*

村井秀夫・松尾信一
信州大学農学部 家畜衛生学研究室

はじめに

明治維新以来、吾国の獣医学の教育は、他の学問分野の場合と同様、西洋式に変えられて現在に至っている。最近、中国の伝承獣医学に対する関心が高まっているが、同時に、吾国の漢方獣医学、すなわち、日本の伝承獣医学を再検討すべき時機にきているものと思う。

科学の、ある分野では、最近、「行づまりの打開」という声が聞かれるが、東西両洋の学問の調和によって、新しい進展の道が期待できるのではあるまいか。

長野県（信濃の国）は、古来、馬産地として有名であった。例へば、仁科⁸⁾（1972）によれば、人皇十代崇神天皇の末の王子、仁品親王の従臣海川求馬が、信濃で牧の濫觴ともいべきものの司をした記録があり、また市村⁴⁾（1943）によると、平安時代には、信州に御牧がおかれ、牧馬国として有名であった。また全国一の貢馬の献上国で、信州の貢馬は特に「望月の駒」とよばれ、献上は8月15日の月明の夜に行なわれた。この行事は「駒牽」といい、宮中の重要行事に数えられていた。

いまでも、地名、遺跡、神社仏閣にその面影を窺うことができる。

長野県駒ヶ根市の旧家「笹古家」の蔵から馬医に関する巻物が発見され、昭和47年（1972）1月以降、この巻物について調査の機会に恵まれた。この調査が、今後の吾国の獣医学の指針の一助ともなれば、調査の意義はますます深まるものと考えられる。

第1 巻物の外観

長さ約6 m（5.98m）、幅0.27m、和紙造り、巻頭から約12cm位迄は、黒漆が塗られていたことが判定される。紐は既に脱落していて、ない。処々に破損、しみ等があるが、保存状態は比較的良好で、解読や調査に支障はなかった。

第2 巻物の内容

巻物に書かれている文字、画かれている絵図は墨書を主とし、外に青、赤、白、黄の絵具が使用されている。開巻して、目に映ずる順序に従って項目別に整理して示すと、次の通りとなる：

昭和49年10月31日受付

* 本研究は第14回国際科学史会議（1974年8月、東京）で講演した。

- 1) 巻頭「五輪碎」の文字 (第1図)
- 2) 色体表 (第1, 2図)
- 3) 五輪塔 (絵) 5色で彩色 (第2図)
- 4) 仏の手 (絵) 5色で彩色 (第2図)
- 5) 解剖 (背面) 図 5色で彩色 (第3図)
- 6) 馬体外貌図 (第3図)
- 7) 𠄎 (サンスクリット文字, 発音ア) 5色で彩色 (第4図)
- 8) 五輪塔 (絵) 5色で彩色 (第4図)
- 9) 解剖 (腹面) 図 5色で彩色 (第4図)
- 10) 馬の顔 (絵) (第4図)
- 11) 仏の顔 (絵) 5色で彩色 (第5図)
- 12) 馬体の部片の図とその名称 5色で彩色 (第5図)
- 13) 馬体外貌図 5色で彩色 (第5図)
- 14) 四季別「気」の消長表 (第6図)
- 15) 五輪塔説明表 (第7図-1)
- 16) 馬の五臓の五本尊名一覧表 (第7図-2)
- 17) 前掲12) 図の説明表 (第7図-3)
- 18) 前掲13) 図の説明書および四季別の五臓の病氣予後判定説明書 (第8図)
- 19) 馬体の鍼 (針) の部位とその説明書(1) (第9図)
- 20) 同 上 (2) (第10図)
- 21) 巻末の文章 (第11図)
- 22) 伝承系路と伝承者氏名ならびに日付 (第12図)

上記の各絵の大部分は、それぞれ5色によって彩色されている。各絵の同色の部分は、同色の線で相互に連絡されている。これら5色の線は、巻頭の文字の辺りを起点として、色体表の関連箇所の中を通り、各絵図の同色の部分を連結しながら、13) 馬体外貌図の、それぞれ同色の部分に終わっている。

第3 各項目別内容

1) 五輪碎 (ごりん・くだき)³⁾ (第1図)

開巻すると巻頭に、赤線で三角形が画かれてあって、その三頂点に相当する位置に、五輪、碎と三文字が(右まわりに)墨書されている。当時、ごりん・くだきと読まれていたようである。この文字の意味するところは、五輪の平衡が破れたことを示し、結局病気を意味するものと思われる。「五輪碎」という概念は、現代の有機体のホメオスターシスの概念と似たものが感じられる。

2) 色体表 (第1, 2図)

五臓の色体表の1部が示されている。五臓と五行、五大、五腑、五季、五色などとの関係を示す現行の色体表と比較すると、五行は通常木、火、土、金、水の順であるが、本巻物の色体表では木、火、金、水、土の順になっている。この配列は天台仏教医学での配列と同じ

である。また、本巻物では、五根は眼、耳、鼻、舌、意とあるが、本巻物中の後述の内容や、また、現行の色体表¹⁾から、本巻物の五根は眼、舌、鼻、耳、身(唇)と改めるのが良いと思われる。また本表の五味は所謂「敵味」³⁾を示している。

3) 五輪塔(絵) (第2図)

絵は下から上に向い、5色に色別に彩色され、かつ、文字が記入されている。すなわち、(脾、土、黄色)、(腎、水、黒色)、(心、火、赤色)、(肺、金、白色)、(肝、木、青色)である。この絵に対する説明表は15)五輪塔説明表に記載されている。

4) 仏の手 (第2図)

普通、手の5本の指を、小指から順次に、地(黄色)、水(黒色)、火(赤色)、風(白色)、空(青色)に配して、手の5指を五輪としている。本巻物の仏の手の絵は、この五輪を示すとともに、済度、慈悲をも暗示するものと推定される。ただ、本巻物の手の指は、上述の順と異った配し方で、小指から順次に水(黒色)、風(白色)、地(黄色)、火(赤色)、空(青色)と配されている。

5) 解剖(背面)図 (第3図)

本解剖図は、馬の背面解剖図で、脊柱を正中線として、前方を鼻、後方を尾の文字で前後を示し、脊柱の左側に、前方より小腸、ついで順次後方に胆、胃、腎を図示しており、脊柱の右側に、前方より大腸、ついで順次後方に肝、脾、命門を図示している。後方右側の体外に独立して、1つの臓器を示しているが、これには名称が付されていない。これらの絵図は臓器毎に彩色され、計5色が識別できる。

6) 馬体外貌図 (第3図)

第3図に示す通り、計22箇所の馬体の名称が図示されている。

7) 𑖀 (サンスクリット文字) (第4図)

𑖀の発音はア、ローマ字でa、漢字では阿と表記される。この文字は万有の根源、大日如来の種子で、総ての仏を現わす文字ともされている。ここに、この文字が使われているのは、これらの意味を含め、学問的裏付け、権威付けと、仏教用語でもあるので、その根底に慈悲の意味付けも考えられる。また、本巻物の馬医術の始祖は馬鳴菩薩(めみようぼさつ)で、梵語で Aśvaghosa であるので、この頭文字をとって𑖀が用いられているという考えも否定しがたい。馬鳴菩薩⁹⁾は馬鳴比丘とも馬鳴大士ともいわれる。長老脇の弟子で、餓えた7頭の馬に説法を聞かせ、馬は目前に与えられた草もたべずに涙を流しながら法を聞いたという故事から、馬鳴菩薩と号したとされている。もともと、養蚕の神であるが、馬鳴という名前から、馬関係の神のように取扱われている。本巻物に書かれている𑖀は、5色で彩色されているが、これは五行説の表示であろう。

8) 五輪塔(絵) (第4図)

この五輪塔の絵は、前掲3)の絵と同形で同様の彩色であるが、後者の絵には五臓と五行とを示す文字が書かれているのに対し、この絵には、五臓と五大を示す文字が記入されている。すなわち、下より順次上に向かって、(脾、地、黄色)(腎、水、黒色)(心、火、赤色)(肺、風、白色)(肝、空、青色)である。この五輪塔の説明表は15)にある。

9) 解剖(腹面)図 (第4図)

本解剖図は、前掲5)の図と同様、馬の解剖図である。腹面図のため、図面の向って右に

「左」の文字、向って左に「右」の文字が書かれている。正中線にそって、上方より、気管(名称の記入なし)、肺、心、胃を画き、右側(図では左)に大腸、肝、命門、小便門を画き、左側(図では右)に小腸、胆、腎、大便門が画かれている。また左側(図では右)体外に、上方から上焦、中焦、下焦の3文字が書かれているが、具体的に指示する臓器は画かれていない。命門は漢方医学では右腎^{2) 6)}とされ、この解剖図でも右腎の位置と思われる位置の臓器が命門と指示されているが、この外、命門には副腎¹⁾という解釈もなされている。三焦の定義は明瞭を欠いている。五臓の中にあつて、上下の行気を通ずるもの²⁾、あるいは、上焦は胸管を中心とする胸郭以上の全リンパ管系、中焦は、臍を中心とする上腹部のリンパ管系、下焦は、乳糜管を中心とする下腹部以下の全リンパ管系という説がある。また、生れながらの体に内具する力を先天の原気といい、後天の原気として、心肺を通じ入ってくる天地間の精気を宗気とし、消化器を通じ入ってくる天地間の精気を營気および衛気として、上焦は宗気を、中焦は營気を、下焦は衛気を取り入れる門であるとする説¹⁾もある。

この解剖(腹面)図は、前掲5)の解剖(背面)図とともに、馬の内臓の関係位置を示すものと思われるが、実馬を解剖して得られた図か否かは疑わしい。あるいは、人の解剖図の転用とも考えられる。その理由としては、馬の解剖図であるのに、胆嚢が画かれていること、絵があまりにも抽象的、对象的であつて、実証的でないということがあげられる。

10) 馬の顔(絵) (第4図)

11) 仏の顔(絵) (第5図)

本巻物に、馬の顔、仏の顔が画かれているが、馬と五行との関連、馬と仏との関連を示し、馬医書として、権威付けと仏の慈悲とを示しているものと考えられる。

12) 馬体の部片の図とその名称(第5図)

本巻物に画かれている彩色された馬の部片図を整理すると、1組3部片で計5組、合計15部片が図示されている。この5組は、組毎にそれぞれ彩色が異り、計5色が使い分けされている。五色、五臓によって部片をまとめると、所謂五支、五主、五根を示すものとなる。

13) 馬体外貌図(第5図)

本巻物に、5色を使い分けて彩色された馬の外貌図が画かれている。この絵は、後記の18)の表中にある「天之五形」「中之五形」「地之五形」を具体的に絵として現わしたものである。前述12)の馬の部片(彩色)が、本馬体図の同色の部分と、同色の線で結ばれている。これら同色で結ばれた部位や部片は、相互に深い関係を持ち、何れかの部位(部片)の異常は、同色の他の部位(部片)の異常とも関連していることを示すものと推定される。従つて、診断や治療の拠りどころとして、その関連を示すのに用いられた絵と考えられる。

14) 四季別「気」の消長表(第6図)

五行説では、五行(木、火、土、金、水)の「気」の消長を、王、相、死、囚、休に区分し、その最も盛なものを王(旺)とし、以下遂次それに劣るものとして、これを四時(四季)に配している。例へば、春は木王、火相、土死、金囚、水休としている。

本表では、上欄は四季と、それぞれの季の土用の五行(傍らに、五臓と五色を付記している)を示し、下欄は、その「気」の消長を王、相、死、囚、老に区分けしている。本表は、季節別に病気の診断、予後をとするのに利用されたものと推定される。

15) 五輪塔説明表(第7図—1)

第7図-1に示す通り、五輪塔の説明表である。

16) 馬の五臓の五本尊名一覧表 (第7図-2)

第7図-2は馬の五臓の五本尊の名を示したもので、その尊厳さの裏付けとなる表と考えられる。

17) 前掲12) 図の説明表 (第7図-3)

第7図-3は明かに五臓、五行、五腑、五根、五主、五支を示す表で、前掲12) 図の「馬体の部片の図とその名称」と五臓との関連をも示している表である。本表中、「足」を「息」にする方が適当であろう。

18) 前掲13) 図の説明書および四季別の五臓の病気予後判定説明書 (第8図)

本説明書の最初の三箇条には、それぞれ「天之五形」「中之五形」ならびに「地之五形」の説明が書かれている。これは前掲13) 図を説明したものである。しかし、地之五形の説明には、四形迄の説明はあるが、あと一形の説明が欠けている。

第4箇条以下は、四季別に五臓の病の予後判定が既にきめられていて、それが記載されている。

19) 馬体の鍼の部位とその説明書(1) (第9図)

馬体図に、鍼の部位を図示し、その名称、簡単な術式の説明や、効果などが書かれている。これをまとめると第1表の通りである。図示した部位は計9部位である。

第1表 鍼の名称と説明

鍼の名称	摘 要	鍼の名称	摘 要
きやくのはり	術式の簡単な説明	せきたんのはり	
まんよりのはり	〃	きよくたうのはり	術式の簡単な説明, まん病によし
こんはくのはり	さしながら, まりしてん* の名をとのうべし	はぢかた2分	〃
ぢんはいかんのはり	術式の簡単な説明	こんはくのはり	〃, まん病によし
ちやくしんのはり	〃	計 9	

* 摩利支天菩薩⁹⁾：自らその形を隠し、而も常に障難を除滅して利益を施す天部とされている。

20) 馬体の鍼の部位とその説明書(2) (第10図)

前掲19)と同様、馬体図に、鍼の部位を図示し、その名称、簡単な術式の説明、効果などが書かれている。これをまとめると、第2表の通りとなる。図示した部位は計13部位である。

21) 巻末の文章 (第11図)

巻末に約300字にわたる文章がある。その内容は、本巻物の歴史、主要疾病の指摘、斯道を志す門弟たちの心得、心構え、ならびに着眼事項などが書かれている。要約すると次の通りである。

(1) 本巻物は馬医書60巻の巻文を抜粋して1部10巻に要約して、「日本風の調法なもの」

第2表 鍼の名称と説明

鍼の名称	摘要	鍼の名称	摘要
上せう	術式の簡単な説明, 万病によし	はからみの はり	術式の簡単な説明
せんだんのはり	万病によし, けつばによし	したのうら 5分	万病によし, くわぬによし はの病によし
日中のはり	万病によし, 中しょうなり	めひたう 3分	万病によし
しばしかた	万病によし	ふうかん1分 (ちとめのはり)	和歌あり
上たまきのはり	術式の簡単な説明, 万病によし	ちく中の はり	かしらの病, 万病によし
やさき 1寸2分	万病によし	をもひの はり	
よけとどめせより6分 さけてひにくのあいだ 1寸2分	術式の簡単な説明	計 13	

にまとめたものである。安西幡摩守(原文のまま)の自筆の本の写しで、写本は、末学のために仮名書にしたものである。

(2) 病の根源は多いというが、寒熱の二病にすぎるとは指摘し、阿吽^{アウ}出入の二気が寒熱であると解説している。

(3) 日々に師に近づいて学び、夜間は自分で工夫して稽古に努めないと、此の道理解し難い。また、この書を粗略にするのは、師の命に背くことになる。白楽天*の冥利に背くことあってはならない、と書かれている。

この巻末の文章から、この巻物の外に9巻があって、計10巻で1部(組)を構成していることが判る。この10巻の中で、この巻物は書かれている内容から、総論に該当するものと考えられる。また、本巻物で当時の馬医養成の様子もうかがい知ることができる。

22) 伝承者氏名および日付(第12図)

本巻物の馬医術の始祖は、天竺(印度)の馬鳴菩薩(Aśvaghosa)で、次に大唐三蔵法師、次に日本粉川僧正の手を経て、日本に伝えられ、相伝十二継流の後、代々、安西家8代の伝承者によって伝承されたことが記載されている。日付は、天正七丁卯中春十三日書之とあるが、天正七年のエトは己卯が正しいようである。⁷⁾¹⁰⁾¹²⁾宝永七 寅二月写之とあるが、エトは庚寅と思われる。従って、この巻物は天正七年(己卯)中春十三日(1579年)、安西幡摩守(原文のまま)によって書かれたものを、宝永七年(庚寅)二月(1710年)に写本されたものであろう。継承者氏名の中に安西幡摩守(原文のまま)が2名いるので、いずれの幡摩守が書いたか今のところ不明である。また写本した者の氏名も明かでない。

本巻物では、天竺(印度)、中国、日本へと継承の系路が示されているが、一方、菊池東水⁵⁾(1852)は、日本の馬医の道は、聖徳太子の時代(595年)僧惠慈^{エシ}により高句麗(朝鮮半島)から伝えられたとしているので、日本の所謂獣医学は、これら2系統を経て、海外か

* 原文の通りである。現在一般には伯楽天¹¹⁾と伯の文字が使われている。

ら伝えられたことになる。

安西幡摩守（原文のまま）が1579年に、この巻物を書いてから25年後の1604年（慶長9年）に仮名安驥集（全12巻³⁾⁷⁾が橋本道派^{叟*}によって出版されている。これは、当時の最新の専門書であったと推定されるので、その内容を本巻物と比較したが、根本的には両者とも陰陽五行説に基づくものである。宝永7年（1710）に、この巻物が写本されてから、16年後の1726年（享保11年）——将軍吉宗の時代——オランダの馬術師ケイヅル⁷⁾¹¹⁾（Hans Jurgen keyserling）の来日によって、吾国にオランダ式（西洋式）の馬術、馬医術、馬飼養法等が紹介されることとなるので、この時代背景から、これらの資料は、科学史的には、吾国が、まさに、西洋化の第1歩を踏み出そうとする時代の、過渡期の資料といえよう。

なお、安西流は武州の系統であろう。

ま と め

最近、漢方獣医学に対する関心が高まりつつあるが、日本における漢方獣医学、すなわち、吾国に古来伝承されてきた獣医学を再発掘し、科学史の中で占める獣医史の歩みと、その役割とを再検討することは、今後とも、極めて有意義なことであろう。

時あたかも、長野県駒ヶ根市の旧家「笹古家」の蔵から発見された安西流馬医（安驥）に関する巻物を調査する機会に恵まれ、調査を実施したが、その内容の大略は、次の通りである：

1) 本巻物は、仏教と陰陽五行説を基本思想とした馬医書（安驥集）で、その方面の秘伝書の1つと思われるが、その内容から、序論、基礎編にあたるものと考えられる。

2) 本巻物は天正7年（1579年）安西幡摩守（原文のまま）によって書かれたもの（原著）を、宝永7年（1710年）に写書されたものである。原著は、馬医に関する60巻におよぶ巻文から1部10巻に抜粋要約して、「日本風の調法なもの」にまとめたもので、末学のために仮名書にしたと書かれている。当時の主要疾病（寒熱）に関すること、馬医を志願する門弟の心得、心構えなどが教示されている。すなわち、全10巻の内の1巻で、その内容から、序論に当たるもので、また門弟教育の一端をもうかがい知ることができる。

3) 本巻物の馬医術の始祖は天竺の馬鳴菩薩（Aśvaghosa）で、大唐三蔵法師、ついで日本粉川僧正を経て、日本に伝えられ、相伝十二継流の後、安西家8代にわたり伝承されたことを示している。つまり、この馬医書は天竺（印度）、中国を経て、日本に伝承された系路を示しているが、一方菊池東水は解馬新書の序文で、日本の馬医の道が595年に高句麗から伝えられたことが書かれているので、吾国の獣医学は、これら2系路により海外から伝えられたことになる。

4) 馬の解剖図（背面図、腹面図）が画かれているが、実馬を解剖して得られた解剖図ではなく、おそらく、人の解剖図からの転用ではないかと推定される。

5) 本巻物を構成する内容の項目は、大略次の通りである。

(1) 巻頭に五輪碑（ごりんくだき）の文字 (2) 色体表 (3) 五輪塔（絵） (4) 仏の手 (5) 解剖図（背面図、腹面図） (6) 馬の外貌図（部位計22箇所の名称付） (7) 梵字「**𑖀𑖄𑖡𑖅**」

* 橋本道派^叟：叟は老の意、派は派と同じく「流」の古字、従って名は「どうりうそう」とよむ。文献や古書目録に派、弧とあるのは誤りであろう。

(8) 馬の顔(絵) (9) 仏の顔(絵) (10) 馬体の部片(計15箇)別の図とその名称 (11) 馬の彩色外貌図等が画かれており、さらに、(12) 四季別「氣」の消長表 (13) 馬の五臓の五本尊名 (14) 四季別五臓の病気の予後判定表 (15) 馬体の鍼の部位(計22箇所)の説明書 (16) 前掲絵図の説明表や説明書 (17) 卷末文章 (18) 相伝系統図 (19) 日付 などである。

謝 辞

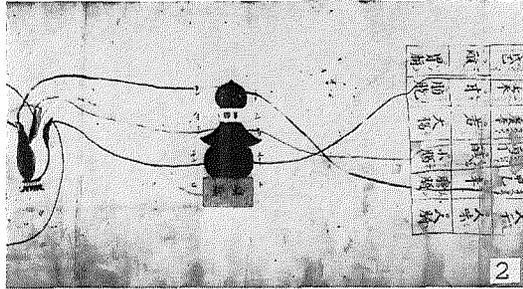
本巻物の調査の機会が得られたのは、長野県駒ヶ根市の旧家「笹古直義^{ササコノキ}氏、肥野宏氏、ならびに信州大学農学部林学科助教授高橋成直氏等の御好意と御協力とによるもので、ここに感謝の意を表する次第である。

参 考 文 献

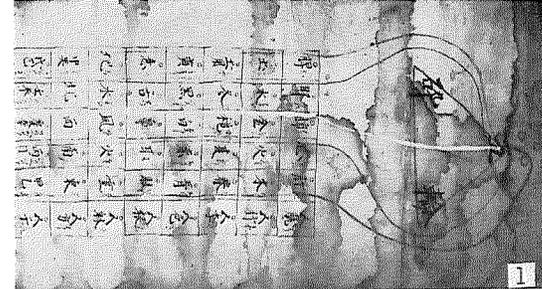
- 1 代田文誌(1972) 鍼灸治療基礎学 医道の日本社 (横須賀)
- 2 富士川 游(1934) 支那思想科学(医学) 岩波書店(東京)
- 3 橋本道派(1604) 仮名安驥集(元禄刊)
- 4 市村威人(1943) 伊那史綱 山村書院(飯田)
- 5 菊池東水(1852) 解馬新書 尚古堂 江戸(東京)
- 6 日本學術振興会(1960) 明治前日本医学史 第一巻 日本學術振興会(東京)
- 7 日本乗馬協会(1940) 日本馬術史 第四巻 大日本騎道会(東京)
- 8 仁科宗一郎(1972) 安曇の古代 柳沢書苑 (長野県北安曇郡)
- 9 織田得能(1929) 仏教大辞典(補訂12版) 大倉書店(東京)
- 10 歴史学研究会(1972) 日本史年表 岩波書店(東京)
- 11 白井恒三郎(1944) 日本獣医学史 文永堂(東京)
- 12 東京大学史料編纂所(1966) 読史備要 講談社(東京)

追記：本巻物は昭和49年12月26日、笹古直義氏から信州大学農学部に寄贈されて、同図書分館で永久保存されることになった。

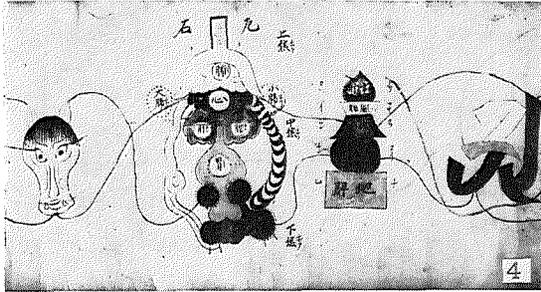
第1図 巻頭文字：五輪碎（ごりん・くだぎ），色体表



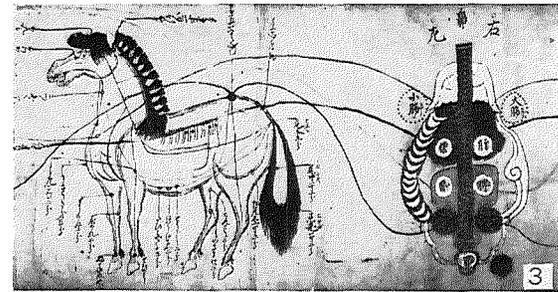
第2図 色体表（1部），五輪塔，仏の手



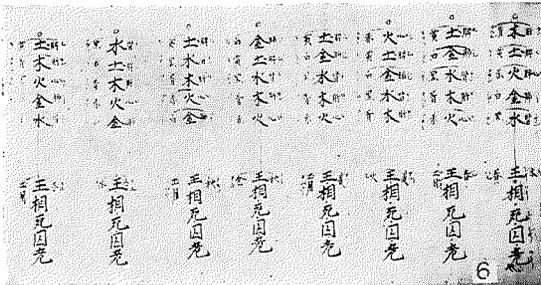
第3図 解剖（背面）図，馬体外貌図



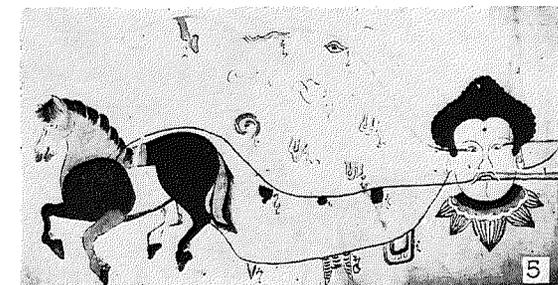
第4図 サンスクリット文字，五輪塔，解剖（腹面）図，馬の顔



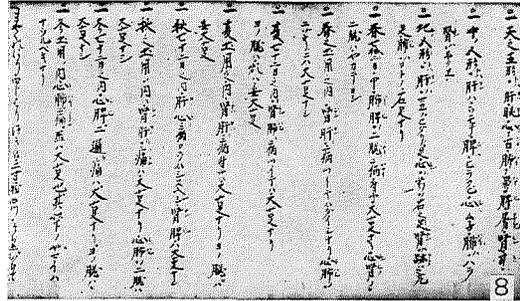
第5図 仏の顔，馬体の部片の図とその名称，馬体外貌図



第6図 四季別「氣」の消長表



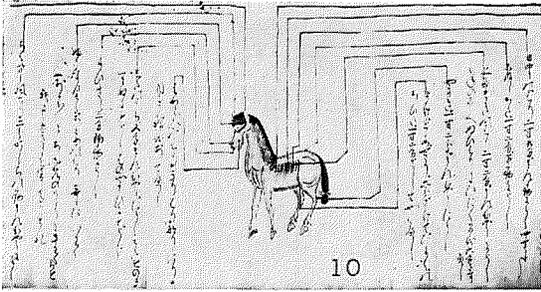
第7図-1 五輪塔説明表



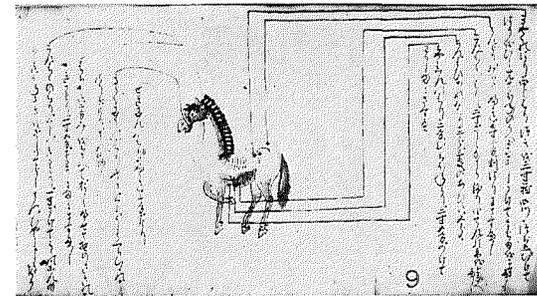
第7図-2 馬の五臓の五本尊名一覧表



第7図-3 第5図の説明表

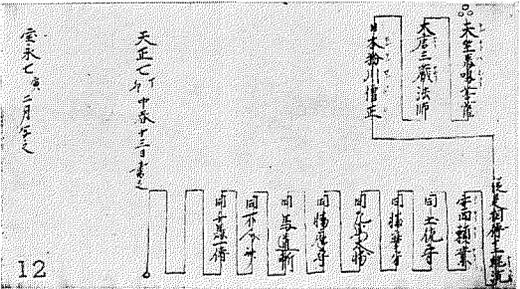


第8図 第5図の説明書, 四季別五臓の病氣予後判定説明書



第9図 馬体の鍼の部位と説明書 (9部位)

第10図 馬体の鍼の部位と説明書 (13部位)



第11図 卷末の文章

第12図 伝承系路と伝承者氏名, 日付

Studies on Scrolls of Veterinary Medicine in Japan.

I. On a Scroll of the Ansai School of the Sasakos in Komagane, Nagano-ken.

By **Hideo MURAI and Shinichi MATSUO**

Laboratory of Animal Hygiene, Fac. Agric., Shinshu Univ.

Summary

Nagano-ken (Shinano no kuni) was very famous for a horse breeding area in Japan. In January 1972, an old scroll of horse medicine was found from an old family, the Sasakos, at Komagane, Nagano-ken.

The scroll was copied in 1710 from the original by Harimano-Kami Ansai in 1579. The basic feature of the scroll is founded on the traditional Chinese horse medicine and Buddhism. It has several sections.

First; the summarized graph of the Chinese five natural elements such as fire, wood, earth, metal and water.

Second; the anatomical charts of the five parenchymatous organs and six viscera, the pictures of a horse body, horse's face, Buddha's face, the five storied stone Pagoda (Stupa) and 𑖀 (sanskrit). These are divided respectively by the five colors (blue, red, white, black and yellow), and the parts of the same color of each picture are connected with a same color line.

Third; explanatory notes and diagrams of interrelationships of seasons, the old calendar, Buddhism, the body and diseases with the five natural elements.

Fourth; two pictures of the horse body show points for acupuncture.

Fifth; the aim of the arrangement of this scroll was to summarize concisely from the Ankishu (the name of Chinese horse medicine).

Lastly; names of authorized scholars of this School. The founder was Memyo Bosa-tsu (Aśvaghosa) in India. Successors; Sanzo priest in Tang (China), Funsen (a Japanese Buddhist priest) etc., and the scroll was kept in the Ansai School. The scroll shows that one horse medicine in Japan was brought directly from China.